

事例報告

## 学びの連続性及び幼小連携の視点から見た 生活科学習についての一考察

針生 弘 久能 和夫 郡山 孝幸 金 賢植 柴田 千賀子<sup>1)</sup>

Hiromu Hariu, Kazuo Kuno, Takayuki Koriyama, Hyunshik Kim And Chikako Sibata<sup>1)</sup>: Study on effective way of teaching 'life' from the viewpoint of connection and cooperation between kindergarten and elementary school: Bulletin of Sendai University, 47 (2) : 57-65, March, 2016.

**Purpose:** This study aims to discuss what “start curriculum” should be, that is designed to connect smoothly kindergarten education to elementary school education. The focus of this study is on relation between pre-school education and school subject ‘Living environment studies’. Also effect of kindergarten-elementary school- cooperation is considered through examining practice at one of the elementary schools in Sendai city. Results: “Start curriculum”, as a practical way to connect kindergartens and elementary schools, bears an important part to makes first-grade students settle in a new environment

**Key words:** ‘Living environment studies’, kindergarten - elementary school- cooperation, start curriculum  
キーワード: 生活科, 幼小連携, スタートカリキュラム

### I. はじめに

平成20年3月に告示された幼稚園教育要領<sup>1)</sup>は、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のために、幼児と児童が様々な行事や機会を通して交流したり、幼稚園教諭と小学校教諭が意見の交換をしたり、双方が一緒にテーマを設けて研究をしたりしながら、連携を図ることを推奨している。

本稿では、幼児教育と小学校教育の接点でもあるスタートカリキュラムに着目し、幼児教育と小学1年生の生活科との関連性を取り上げ、

幼小連携の必要性や課題、効果等について一学校の実践例を通して考察する。

幼稚園教育要領<sup>1)</sup>では、幼児教育のねらいを、幼児の発達の側面から、心身の健康に関する「健康」領域、人とのかかわりに関する「人間関係」領域、身近な環境とのかかわりに関する「環境」領域、言葉の獲得に関する「言葉」領域及び感性と表現に関する「表現」領域に分けて示している。加えて、留意事項の一つとして、幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思

1) 桜の聖母短期大学

考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすることをあげている。そして、特に留意する事項の中に、幼小連携推進の意義をあげ、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続によって、幼児と児童の交流の場を設け、互いの意見交換や合同の研究の機会を通して、双方の連携が一層深まるよう求めている。

一方、小学校学習指導要領解説生活編<sup>2)</sup>では、生活科改定の要点の中で、特に、学校生活への適応が図られるように、第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとしたと述べている。また、同解説<sup>2)</sup>では、スタートカリキュラムの背景には、小学校に入学した後に学校生活への適応が難しい児童の実態があるため、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ることや、総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かすことが必要であるとしている。併せて、小学校入学直後の児童が学校生活にうまく適応できず、授業中に落ち着いて話を聞けなかったり授業の成立が困難になったりする小1プロブレムなどの問題を指摘している。このことを解決し、学校生活への適応を進めることになるとして、幼児教育と

小学校教育との連携の重要性を取り上げ、生活科については、その解決に大きな役割を果たすとしている。また、幼児教育から小学校への円滑な接続を図る観点から、幼児教育と小学校教育の関連性については、児童が自らの成長を実感できるよう低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことに配慮することや、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について交流を深めることも重要であると述べている。

宮城県教育委員会は、平成27年6月から7月にかけて、県内の国公立・私立の幼稚園、保育所、認定こども園及び認可外保育施設を対象に、「幼児教育に関わる実態調査(アンケート)」<sup>3)</sup>を実施した。

図1は、幼保小連携の内容のうち、小学校との連携を図るための連絡協議会等の連携組織があるかどうかを聞いたものである。幼保小連携の必要性が指摘される社会背景の中であって、回答した294の幼稚園、保育所等のうち、あると回答した割合は全体の55.1%で過半数を占めるが、前年度よりも6.4%減少しているという結果になった。

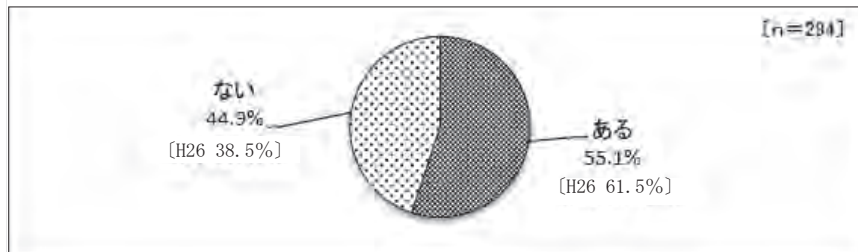


図1 小学校との連携を図るための連絡協議会等の連携組織の有無について  
宮城県教育庁教育企画室学ぶ土台づくり推進連絡会議(2015)「平成27年度幼児教育に関わる実態調査(アンケート)の結果について」をもとに筆者作成

幼稚園教育要領<sup>1)</sup>、小学校学習指導要領解説生活編<sup>2)</sup>の双方が相手校園との連携の必要性を指摘しており、小学校においては特に生活科、スタートカリキュラムにおいて幼稚園との連携が必要となることから、本稿ではそこに着目した。

スタートカリキュラムは、生活科を中心に、体験的に学ぶ小学校の入門期の学習であり、幼児教育から小学校教育への適応や基本的な学習

習慣・生活習慣の形成、教科学習との円滑な接続などをねらいとしている。新入学児童が入学直後において、登校意欲をかき立てられるような、小学校へのスムーズな適応を促すことが期待されるカリキュラムである。児童が幼児期に体験してきた遊びの要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両者を組み合わせた、合科的・関連的なプログラムでもある。

また、スタートカリキュラムには、児童・教職員・保護者の三者にとっても、小学校生活に対する安心感を生み出す側面があり、学校と保護者との信頼関係にも結びつく。

小学校入学後に学校生活に適應できず、登校を渋りがちな児童が増加傾向にあるが、姜<sup>4)</sup>は、幼稚園側に重点を置きながら幼小連携の在り方を述べる中で、このスタートカリキュラムと小1プロブレムなどの問題について触れ、スタートカリキュラムの編成が、小学校入学直後の児童の学校生活への適應を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であると指摘している。また、齋藤<sup>5)</sup>は、郡山市内の小学校におけるスタートカリキュラムに関する取り組みの調査の中で、スタートカリキュラムの設定によって、児童が小学校入学とともに1時間、自分の席で授業を受けなければならないという従来の概念から解放され、時間的にも、学習形態や学習環境面からも柔軟に対応することができるようになり、円滑に小学校生活に慣れる姿が見られたと報告している。

スタートカリキュラムの意義は、幼児教育と小学校教育との連携を重視しながら、小学校生活への適應を図り、生活科を中心とした合科的・関連的指導を行うことにあり、様々な生活経験をもつ児童を小学校生活に適應させていくため、具体的な活動や体験を通して、必要な技能や習慣を身に付けさせることにある。スタートカリキュラムに始まる生活科は、座学が主ではなく、具体的な体験的要素を多く含んだ学習活動であるという特質を持っており、体験活動の中で得た児童の気づきが、学校生活に必要な習慣や技能に結びつく。

## II. 研究方法

現在、多くの学校でスタートカリキュラムを実施している。以下に実践例を紹介する仙台市立泉松陵小学校では、学校誕生の背景から、生活科の単元構成においては特にスタートカリキュラムを重視し、学校生活に関する保護者や地域の不安を解消するため、指導内容の優先度を明確にしながら、よりよい生活習慣を身に付

けさせる時期の整理がされた。

泉松陵小学校は仙台市の松陵団地の中にあり、富谷町に学区を接している。平成25年4月に仙台市立の小学校としては、初めての統廃合により開校した学校である。平成27年度の児童数は369名で、各学年2クラス編制からなり、特別支援学級3クラスを加え、15学級編制の中規模校である。開校以来、地域とともに歩む学校を教育活動の基盤に据え、教育活動を実践している。松陵団地には、平成元年に松陵小学校が開校したが、宅地造成に伴い急激に児童数が増加したことから、2年後の平成3年には松陵西小学校が開校した。その後も団地内の児童数は増加したものの、団地の成熟化によって次第に減少に転じ、仙台市教育委員会は、平成20年9月には保護者説明会、10月には住民説明会を開催するなど、学校規模適正化に向けて、両校の統合を視野に入れた仙台市教育委員会と保護者・地域による話し合いが始まり、誕生までに5年の歳月を要した。

少子化に伴う日本の人口減少が予測される今日、児童生徒数の急激な減少等によって学校規模適正化を前提とした統廃合の動きは、市町村の規模にかかわらず様々な地域で発生し、保護者や地域からは統合後の学校の教育活動に対する多くの要望が出てくるものと推測される。

泉松陵小学校は、仙台市内では前例のない統廃合によって誕生した小学校であるため、保護者や地域からは期待感や不安感とともに様々な要望が寄せられた。特に、登下校の安全面や、幼児教育との円滑な接続をはじめとする学校生活への適應問題への関心は高いものがあつた。

そこで、スタートカリキュラムの設定にあたっては、実施1日目に、「わたしの通学路」というテーマの中で、安全な歩行の仕方を学習する場面を用意し、その後2年生とともに学校周辺を使った歩行訓練の時間を設けた。計画の作成に当たっては、近隣の幼稚園との連携に努めながら、互いの情報交換を通して指導のポイントを確認し、歩かせるコースを選択するなど、交通ルール中心の実地指導を行うことにしている。表1は、4月第2週のスタートカリキュラムの例である。ここでは、小学校生活へのスムー

ズな適応を促すため、2年生や6年生との交流の場も確保しているが、ここでの児童の取り組みの様子や活動の内容を、教諭同士による交流会の中で幼小交流会を計画する際の中心的な話題として位置づけている。

子ども間の交流や教員間の交流活動の意義について住野<sup>6)</sup>は、交流活動を通して、幼児と小学1年児童との発達の差異や共通点が明らかとなり、幼稚園教育と小学校教育との連続性についても議論ができるようになると述べている。

表1 4月第2週のスタートカリキュラム

時	M	04月13日(月)	04月14日(火)	04月15日(水)	04月16日(木)	04月17日(金)
行事			仙台市標準学力検査			
業前活動		健康観察	健康観察	はじめまして6年生	6年生となかよし	6年生となかよし
I	1	国 鉛筆の持ち方 線をかこう	音 歌でさんぼ	国 鉛筆の持ち方 わたしのなまえ	国 【学校支援地 域本部】 おはなしよん で	音 歌でさんぼ
	2					
	3				学習の姿勢	
II	4	体 体操着の着替 え	国 鉛筆の持ち方 線のおけいこ	体 【たくいき】 No.4 心と体 をほぐそう	図 すきなもの いっぱい	国 みつけたよ 絵を見て話そ う
	5	並び方				
	6					
III	7	生 どきどきわくわ く1年生③	生 どきどきわくわ く1年生④	算 なかまづくりと かず	体 並び方	生 どきどきわくわ く1年生⑤
	8	【2年生と交 流】 遊具の使い方	2階、3階をた んけんしよう	なかまをつくろ う	おにごっこ	【6年生と交 流】 けやき山
	9	着替え				
IV	10	道 みんななかよ く	算 算数らんどを 開いてみよう	国 みつけたよ 絵を見て話そ う	算 なかまづくりと かず	国 ひらがなのお けいこ
	11				なかまをつくろ う	
	12					

図2は園児と1年生の交流学習実施計画、図3は園児・1年生と5年生の交流学習実施計画の例であるが、いずれも生活科学習の一環

として実施されているものであり、教師の相互交流を通じて指導内容や指導方法について検討したものである。

## 平成27年度 第1回 幼小交流会 実施計画(案)

- 1 活動名 **いっしょにあそぼう交流会**
- 2 ねらい 共通：1年間交流する相手と顔合わせをし、一緒に仲良く遊ぶことで、これからの活動に意欲をもたせる。  
園児：小学校の様子を知らせ1年生の姿にあこがれをもたせることで、入学への期待感を高める。  
1年生：幼稚園児と触れ合うことで、1年生としての自覚を持たせる。
- 3 日時 9月17日(木) 3・4校時・昼食時間 (幼稚園児も1年生もお弁当持参)  
＜小学校＞ 事前指導：2時間，事後指導：1時間
- 4 場所 泉松陵小学校 校庭・教室・ワークスペース  
(雨天時…体育館・教室・ワークスペース)
- 5 活動の予定

時刻	小学校	幼稚園
10:45	○教室にて事前指導	○小学校へ 徒歩(雨天時バス)
10:55	○準備・整列(トイレ後校庭に) *持ち物…赤白帽子 グループで1つ木の実等を入れる袋	○小学校到着 ワークスペースまたはけやき山近くに荷物を置き、校庭へ。
11:00	○交流会開始 ＜進行 小学校＞ ・1年生からあいさつ(代表児童2人) (小学生と園児混合で18グループ) ・けやき山へ登る(9G)・校庭で遊ぶ(9G) 人数が多いので交代で活動する。 (雨天時 体育館にてゲーム)	○交流会開始 ・先生からあいさつ ・けやき山へ登る ・校庭で遊ぶ (小学生と園児のグループで) (雨天時体育館にてゲーム)
11:40	○校舎内へ移動	○校舎内へ移動，迷路を作る
11:50	○迷路を作る ・空き箱にトイレトペーパーやけやき山で見つけた枝や木の実を使って (のり等の道具は1年生)	＜進行 幼稚園＞ ・1年生と一緒に作る。 (空き箱，トイレトペーパーの芯は前日搬入)
12:20	＜進行 小学校＞ ○教室・ワークスペースにて ○お弁当準備(敷物，お弁当) ・活動の時と同じグループで食べる ※交流できるように配慮	○お弁当準備 (お弁当，敷物) ・1年生と一緒に食べる ・活動のときと同じグループ
12:30	○いただきます	○いただきます
13:05	・1年生からあいさつ(代表児童2人) ・幼稚園の友達にカードを渡す	
13:10	○ごちそうさま	○ごちそうさま ・帰りの準備
13:15	・お見送り	○小学校出発

図2 園児・1年生の交流学習実施計画

平成27年度泉松陵小学校「幼小交流計画」をもとに筆者作成

## 平成27年度 第3回 幼小交流会 実施計画(案)

- 1 活動名 **がっこうのことをおしえるよ交流会**
- 2 ねらい 園児：1年生と一緒に学校を見学したり，学校生活の紹介を聞いたり，5年生と一緒に遊ぶことで，小学校入学への期待感や安心感を持たせる。  
1年生：幼稚園児との交流や学校生活の紹介を通して，自分の成長に気づく。  
5年生：幼稚園児と一緒に遊ぶことを通して，最上級生となる期待感や自覚を持たせる。
- 3 日時 平成28年2月18日（木） 業間～3校時  
＜小学校＞ 事前指導：1時間，事後指導：1時間
- 4 場所 泉松陵小学校 多目的ホール
- 5 活動の予定

時刻	1年生	幼稚園	5年生
10:10		<ul style="list-style-type: none"> <li>・到着後，多目的ホールへ</li> <li>・持ち物を置いて体育館へ移動（3～6年生昇降口利用）</li> </ul>	
10:20		<ul style="list-style-type: none"> <li>・5年生と一緒に遊ぶ</li> <li>・事前に12グループに分ける担任が先頭で体育館に移動し，園児を各グループに送り出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育館へ集合</li> <li>・児童代表のことば</li> <li>・幼稚園児と一緒に遊ぶ</li> </ul>
10:45 11:50	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホール集合</li> <li>・開会 はじめのことば 校長先生の話 学校生活の紹介 おわりのことば （時間内で終わるよう配慮）</li> <li>・グループごと整列し出発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多目的ホールへ移動</li> <li>・学校生活の紹介を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童代表のことば</li> <li>・3校時開始</li> </ul>
11:35	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホールへ戻り，整列（トイレの声かけ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレをすませて整列</li> </ul>	
11:40	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホール集合</li> <li>・おわかれの会</li> <li>・幼稚園児を見送る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホール集合</li> <li>・おわかれの会（歌）</li> <li>・学校を出発する。</li> </ul>	

図3 園児・1年生と5年生の交流学習実施計画

平成27年度泉松陵小学校「幼小交流計画」をもとに筆者作成

図2の交流会は初めての交流会であるため、一緒に弁当を食べながら交流を深めたり、園児の小学校入学への期待感を高めたりする内容にしている。図3の交流会では、1年生が園児の案内役や進行を担当したり、次年度に向けたよい人間関係を作ったりする内容にしているが、これらの活動のねらいは、児童が幼児と一緒に学習活動を行うことで、自らの成長を実感できるようにすることにある。

また、泉松陵小学校は、地域とともに歩む学校づくりをめざし、年間のべ2500名ほどの保護者や地域等の学校支援ボランティアに協力してもらっているが、生活科においても、保護者や地域、小1生活学習支援ボランティアなどの外部人材を多数活用し、児童の対人的環境への適応を図っている。

幼小連携を進める上で、ベースとなるのが教師間の交流である。共同で研修会を行ったり、定期的に情報の交換をし合ったり、双方の授業を参観したりするのが一般的である。

泉松陵小学校では、近隣の幼稚園園長を学校評議員の一人に委嘱し、幼稚園側から見た小学校教育に関する意見を取り入れ、スタートカリキュラムなどの中に活かしている。また、幼保小合同研修会は、年1回夏に開催し、それぞれの取り組みの紹介や課題について職員間の共有化を図っている。教務主任や低学年の担任、地域連携担当者を中心とした幼保小連携担当が幼

稚園や保育所に働きかけ、幼稚園、保育所、小学校の三者による幼保小連絡会を年3回実施し、施設見学や授業参観、就学前の情報交換等を行っている。例年夏休みに近隣の中学校と合同で実施する小中合同講演会の際には、近隣の幼稚園、保育所、高校にも参加を呼びかけるなど、地域内の縦の連携づくりにも努めている。しかし、多くの小学校と同様に、関連する幼稚園や保育所の数は20以上にもなるため、全ての幼稚園や保育所との連携は困難であることから、特定の近隣の幼稚園や保育所との連携が主になっているという現状にある。幼稚園、保育所、小学校の三者が、スタートカリキュラムに関する情報を共有化するためには、近隣の小学校同士、幼稚園・保育所同士が横の連携やネットワークづくりを進め、関連情報を入手しやすい環境作りに努める必要がある。

宮城県教育委員会の調査<sup>3)</sup>によると、幼稚園や保育所等が小学校と連携を図っている内容として最も多いものが就学時の引継ぎであり、次が情報交換、そして児童との日常的活動や授業、行事等の交流の順となっている。

教員間の話し合いは、教育課程の見直しや方針変更にもつながるとして、丹羽ら<sup>7)</sup>は、幼保、小学校教諭は、幼保で育まれたものを小学校生活へつなげ、更に伸ばす形になるよう、協力しながら、カリキュラムや方針を考えていく必要があると述べている。

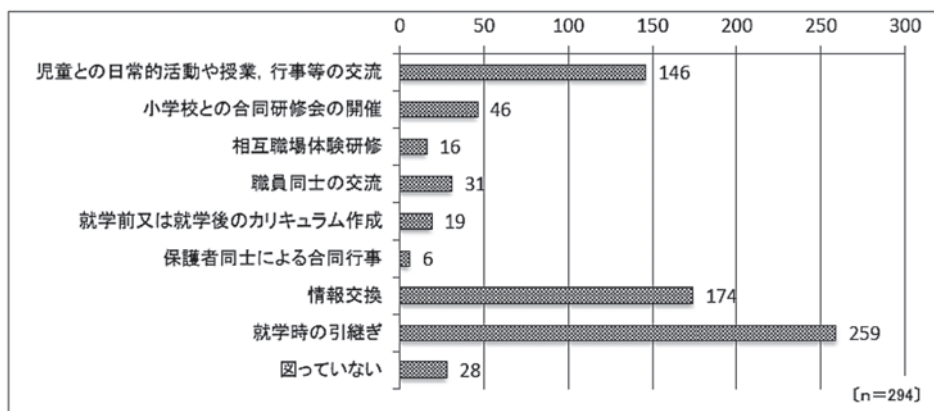


図4 小学校との連携の内容について（該当するもの全てを選択）

宮城県教育庁教育企画室学ぶ土台づくり推進連絡会議（2015）「平成27年度幼児教育に関わる実態調査（アンケート）の結果について」をもとに筆者作成

しかし、図4では、就学時の引継ぎや情報交換等と比較し、スタートカリキュラム作成の素地となるような小学校との合同研修会の開催や職員同士の交流、相互職場体験研修、就学前又は就学後のカリキュラム作成といった取組を実施している幼稚園、保育所の割合は低いものとなっている。

前述したように、泉松陵小学校の場合は、幼小交流会や幼保小合同研修会、幼保小連絡会、小中合同講演会等を連携の中心に置いている。特に、教諭が幼児教育と小学校教育との円滑な接続に関しては熱心な情報交換を行い、話し合われた内容をスタートカリキュラムにおける指導のポイントを焦点化する際に活かしていることは特筆すべきことであろう。

### Ⅲ. 考察

和田<sup>8)</sup>は、元来、生活科は、幼児教育と小学校教育の滑らかな接続のために誕生した教科であり、小1プロブレムなどの問題が叫ばれている今こそ、生活科の原点に帰って、幼小連携や滑らかな接続に力を発揮していくべきだと述べている。幼稚園教育要領<sup>1)</sup>や保育所保育指針<sup>9)</sup>のねらいには、子どもを育てていく方向性が示されている。同要領<sup>1)</sup>には、到達目標を示すのではなく、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で、相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものとし、子どもの育ちの方向性を示している。実践例で取り上げた泉松陵小学校のスタートカリキュラムは、幼稚園、保育所との連携の中で、中心に直接体験を重視した生活科を据えている。幼児教育と小学校教育との滑らかな接続のためには、幼稚園、保育所、小学校の三者による話し合いの場を計画的に設定することが必要である。そして、話し合う内容は、就学時の引継ぎや情報交換に留まることなく、図4にあるようなスタートカリキュラム作成の素地となるような内容についても検討することが、小学校生活への適応を進める観点からも望ましい。

また、スタートカリキュラムの編成に当たっては、教科学習への移行を意識した活動を心が

けていくことも大切である。小学校生活に慣れるまでの間、入学以前の活動との連続性を考慮し、幼稚園等で慣れ親しんだ遊びを取り入れたものを單元の中に設定したり、学年合同や複数学級合同、学級単独などのように学習形態を変えたり、音楽、体育、国語、学級活動などとの合科的・関連的指導を取り入れたりしながら、指導方法の工夫をしていくことが考えられる。

姜<sup>4)</sup>は、幼稚園と小学校がそれぞれの役割を十分に果たしながら、幼小の円滑な接続を図る過程において、教員同士の話し合いは中核的な役割を果たしている、とその効果を指摘しているが、図1に示したように、幼保小連携の内容のうち、小学校との連携を図るための連絡協議会等の連携組織があると回答した割合は、過半数の55.1%となっている。

子どもの実態に即したスタートカリキュラムを作るには、職員同士が互いに授業や生活指導の様子を観察したり、互いの子どもに関する情報を交換し合ったりする交流によって、幼稚園や保育所で行われている幼児教育を小学校の教職員が理解することが重要である。

しかし、図1にあるように、連絡協議会等の連携組織がある割合は過半数に留まり、前年度よりも6.4%減少しているという結果であった。連絡協議会等の設置割合が減っているという状況の中で、泉松陵小学校では開校と同時に幼保小合同研修会や幼保小連絡会などを設置し、それがスタートカリキュラムづくりの事例に良い結果を及ぼしている。

教員同士の話し合いの中で、幼稚園では、子どもは1日をどのように過ごしているのか、子どもたちにどんなことを教えているのか、個別支援が必要な子どもにはどんな指導が有効なのか、保育所であれば、どのような援助や支援をしているのかといった、入学後にすぐに役立つ情報を集めることが必要である。また、保護者との関係においても、子どもを育てるにあたって保護者にはどんな約束やお願い事をしているのか、小学校入学に関してどんな不安を抱えているのかなどの情報は、保護者の意向や考えを把握する際に役立つばかりでなく、小学校がスタートカリキュラムを作成する際の参考にもな



り、子どもに対する支援の連続性も生まれる。

## 文 献

### IV. まとめ

生活科のスタートカリキュラムに着目し、単元設定などを中心に実践例を紹介した。スタートカリキュラムは、幼児教育と小学校教育の接続の場であるばかりでなく、小1プロブレムなどの問題解決には有用であり、今後もそれぞれの学校では、児童を中心に据えた学習内容の更なる充実が求められてくる。そのような状況を見ると、教師間交流や園児・児童交流を中心とした幼小連携が、このスムーズな接続に果たす役割は大きい。幼小連携を通して、幼稚園、小学校の双方がそれぞれに幼児・児童を中心に据えたカリキュラムや方針を見直し、すりあわせをする機会を設けることも必要となるであろう。そして、児童の小学校生活への適応を支援する幼小連携を機軸にしたスタートカリキュラムは、児童を取り巻く新しい教育環境への適応を推し進める役割として益々重要なものになると言えよう。

- 1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 2) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説生活編
- 3) 宮城県教育庁教育企画室学ぶ土台づくり推進連絡会議 (2015) 平成 27 年度幼児教育に関わる実態調査 (アンケート) の結果について
- 4) 姜華 (2012) 幼小連携に関する施策と理念についての一考察. 早稲田大学大学院教学研究科紀要: 別冊, 20 - 1
- 5) 齋藤和代 (2015) スタートカリキュラムについて考える. 福島大学総合教育研究センター紀要: 第 19 号 抜刷
- 6) 住野好久 (2006) 幼小連携における「交流活動」の意義と実践課題. 岡山大学教育実践総合センター紀要 第 6 巻
- 7) 丹羽さかの, 酒井朗, 藤江康彦 (2004) 幼稚園, 保育所, 小学校教諭と保護者の意識調査: よりよい幼保小連携に向けて. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要
- 8) 和田信行 (2013) スタートカリキュラムの実施とその効果の検証. 東京成徳短期大学 紀要 第 46 号
- 9) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針

( 2015 年 11 月 30 日受付 )  
( 2016 年 2 月 3 日受理 )